

愛媛県歴史文化博物館研究紀要 第三一号 抜刷  
二〇二六年三月

案内記類の作者が捉えた四国遍路の道標石

今村賢司

## 案内記類の作者が捉えた四国遍路の道標石

今村 賢 司

はじめに

江戸時代以降、四国八十八箇所霊場を順拝する四国遍路が普及した背景には、巡礼者が道に迷わぬよう遍路道沿いや札所などに設置された道標石の存在があげられる。

四国遍路の道標石の設置活動は、弘法大師信仰の広がりのもとで、真念、武田徳右衛門、中務(司)茂兵衛をはじめ、各地の篤志家によって、連綿と受け継がれてきた。遍路道標石には札所への道程や交通情報のほか、信仰形態、設置者、さらには広告や巡拝回数といった多岐にわたる事項が刻まれている。これらは各時代の地域における四国遍路の実態を反映した、かけがえのない貴重な歴史資料といえる。

戦前の昭和期は旧遍路道や遍路道標石が今日よりも残存し、徒歩による遍路を前提とした四国遍路の案内記類が数多く刊行されるなど、伝統的な遍路環境が維持されていた時期であった。昭和十七年(一九四二)の荒井とみ三『遍路図会』、同一八年(一九四三)の宮尾しげを『画と文 四国遍路』などの絵入りの案内記には遍路道の風景として道標石が描かれ、また、昭和八年(一九三三)頃の永井刀専による木版彩色絵葉書「伊豫の春」(写真①)には遍路道標石を注視する遍路の姿が作品に収録されているように、道標石は四国遍路文化の象徴の一つとして捉えられている。

本稿では四国遍路の道標石に着目し、戦前の昭和期までに刊行された四国遍路の案内記類から道標石に関する記述を抽出する。その上で、多様な立場の巡礼者が道中の道標石をいかに認識していたかを考察する。さらに、得られた知見に基づき、道標石の機能的特色や、それらが映し出す四国遍路という巡礼文

化の特質について究明したい。

なお、戦前期までの四国遍路案内記類には、今日において不適切とされる差別的表現が含まれている。本稿では人権上の配慮から、原則としてこれらを「視覚障がい者」や「生活困窮者」等に書き換えて記述した。ただし、史料からの直接引用については、歴史的事実態を正確に期すため、当時の表現をそのまま用いることとした。

### 一 四国遍路の案内記類に紹介された道標石

昭和時代(主に戦前)に作成された代表的な四国遍路の案内記類の中で道標石について言及したものに、①昭和五年(一九三〇)の島浪男「札所と名所 四国遍路」、②昭和六年(一九三一)の安田寛明『四国遍路のすすめ』、③同年のアルフレート・ポナー『同行二人の遍路(邦題)』、④昭和九年(一九三四)の安達忠一「四国雑話」、⑤昭和十三年(一九三八)の高群逸枝『お遍路』、⑥昭和十八年(一九四三)の宮尾しげを『画と文 四国遍路』、⑦昭和二五年(一九五〇)の橋本徹馬『四国遍路記』などがあげられる。それらを刊行順に見ていく。

#### 1-1 島浪男「札所と名所 四国遍路」 昭和五年(一九三〇)

四国遍路の案内記類の中でも四国遍路の道標石について詳しく見解を述べたものに、昭和五年の島浪男「札所と名所 四国遍路」(宝文館発行)があげられる。

島浪男(本名は飯島實)は旅行記や紀行文を著した日本の作家である。本書

以前には昭和三年（一九二八）に『景勝行脚 旅から旅』を著している。

『札所と名所 四国遍路』は昭和三、四年に四国を旅した島浪男が、日本旅行文化協会（後の日本交通公社）の機関紙として大正一三年（一九二四）に創刊した日本最古の旅行情報誌『旅』<sup>5</sup>に発表した内容をまとめたもので、四国遍路の観光化を説いている。

当時、島は観光旅行としての四国遍路の可能性を探る試みとして、徒歩による長期間の遍路でなく、可能な限り交通機関を利用し、旅の日数を切り詰めている。そのため、札所も順番通りに記載しないが、四国巡拝中に各地の名所も数多く訪れている。

四国遍路を終えた島は「四國をまはりて 道路標」と題して次の見解を示している。

（前略）四国巡拜の旅では徒歩を本領としてゐるだけに、流石に道路標は完全だった。道の曲り角とか、岐れ路のところには必ず石で出来た立派な道路標が立つてゐたし、さうでないところでも、道端の石垣の石とか、田の畔の半ば埋まつた石とか、時とすると民家の板壁とか土蔵の腰などにまで、何かしら道を教へるしるしがしてあつた。だから四國巡拜の旅では殆んど道に迷ふと言ふ事はないと言つてよい位だ。私はこれ等の指導標識を巡拜道中の景物の一つに数へたい。

前者の——曲り角とか岐れ道にある石の道路標は、その土地の人達かと、又は他府縣の所謂篤信の土が建てたもので、「へんろ道」「遍んろみち」「何番ミち」「何々寺へ何丁」等の文字を深く彫りつけ、その上に必ず浮彫で手の形を彫り出して方向を示してあつた。これ等について、伊予のある寺への途中、しばらく一緒に歩いたお遍路さんは私にかう語つた。

「手の形が浮き出しになつてゐますから、たとへ盲でも、あれを探つてみては先途々々で行けるわけです。」

私は四十何番だつたかの道すがらで追ひ越した盲目のお遍路を、そして又、阿波の鶴、太龍寺の間の山道で見た、六十位の盲目の夫の杖を曳いて、その

忠実な配遣（つれあひ）らしい老婆がそり／＼と山を下る光景を憶ひ出した事であつた。

実際的に言つて、それ等が果して盲遍路達にどれほどの役に立つかは知らないが、単に右何番道、左何々寺道など、せず、わざ／＼手の形を浮き出しにしてあるのは理想はそこにあるのだろう。兎に角かうした形式の道路標は他では見られないものだ。

徒歩による四国遍路でなく可能な限り交通機関を利用することを推奨した島であつたが、「流石に道路標は完全だつた」と称賛しているように、遍路道の曲り角や岐路には必ず立派な道標石が建てられ、さらに、道端の石垣、田の畔、民家の壁、土蔵の腰などにも道案内の標示があり、「四國巡拜の旅では殆んど道に迷ふと言ふ事はない」とし、道標石は四国遍路の風物の一つであると感想を述べている。

また、島は遍路道標石の設置者について、その土地の人達や他府縣の篤志家が建てたものと見て、それらの特徴として「へんろ道」「遍んろみち」「何番ミち」「何々寺へ何丁」等の文字を深く彫り込み、その上に必ず浮彫りで立体的に手の形を彫り出して方向を示していることを指摘している。そして、一緒に歩いた遍路から、浮き出しの手形のある道標石は視覚障がい者に配慮されたものと教えられる。

実際に四国で歩くことが少なかった島でさえ、視覚障がい者有する遍路に何度か出会っているように、当時の四国霊場には目の不自由な遍路が巡拝する姿を見るのは日常的な光景であつた。しかし手形の指示が実際に視覚障がい者にどれほど役に立ったのかは疑問視している。文字でなくわざわざ手の形を浮き出しにしているのはそうした理想にもとづき、「兎に角かうした形式の道路標は他では見られないものだ」とし、手形の浮彫による方向指示の入った道標石の存在は四国遍路の特徴であると指摘する。

続いて島は遍路道で確認した原始的な道標石に興味を示している。

後者の——道端の石垣、土蔵の土台石などに書きつけた指導標識も面白い。石面の平な部分を撰んで、単に卍や頗る原始的な指差しの恰好などが描いてあるだけだが、それ等はそれだけで札所なり、札所道なりを示してあるのであつた。これ等は恐らく誰が書くともなく何百年来続けられて来たものであつて、たとへば、よく賽ノ河原と言ふところに我一つ彼一つ積み上げた小石が、後来る者の道しるべとなつてゐるところと同じやうに、一寸見るとあまりにも雑然たる落書であるそれ等も、その一つくを子細に考へるならば、やはり先人の後人に対する親切の現れなのだ。——いや、親切と言ふよりは、寧ろさうする事が先人の後人に対する義務なのかも知れない。甲の示すところによつて誤りなくおのれの道を進む事の出来た乙は、丙のために道を教へて置いた。丙は今、おのれの後から来る丁のために、正しき道を示して置く可きだ。人の世もかうしたものではあるまいか？ 先世は後代に、一つの時代は次の時代といふ具合に、人の世を一步步々理想の世界にまで進展させて行くのが、一つの世を継承したもの、義務ではあるまいか？ 路傍の頑石面上怪しげな卍の文様を視つめて、私はふとこんな事を考へた事であつた。

道端の石垣や土蔵の土台石など、自然石の石面の平な部分に卍印やきわめてシンプルな指差しを書きつけた道標を見た島は、これこそが何百年も続けられてきた原始的な道標で、賽の河原で一つ一つ積み上げられている小石を例にして、道標の設置は先人の後人に対する親切の現れであり、一步步理想の世界に進展させていくのが我々の義務ではないかと考えを巡らせている。島が指摘する「手の形を彫つた道標石」については後述する。

## 1-2 安田寛明『四国遍路のすすめ』昭和六年（一九三二）

昭和六年の安田寛明『四国遍路のすすめ』は、四国遍路の詳細な入門書である。当時の出版広告によると、発行所は東京市外中野町宝仙寺中野大師堂で、「筆者は敬虔なる大師信者で、四国を遍路すること既に七回本書は洵に深切丁寧なる遍路手引きとすべきであらう」と推奨している。敬虔な弘法大師信仰の

持ち主であつた安田は、昭和五年（一九三〇）に第五十番繁多寺において一人に手拭の接待を行い、同年に大願成就した記念として山門前に「四国遍路壹万人接待施工大願成就記念碑」を設置した。

遍路経験豊富な安田が巡拝の道中で絶えず接している遍路道標石に関する記述は、ベテラン遍路による道標石観といえる。本書の「第一・御四国遍路のすすめ」には次のように記す。

御四国詣りの遍路の通る街道には道おしえの石が建ててあり、曲がる所、突き当たる所、或いは岐れ道の所などには心を籠めた石の道しるべが三本も五本も並べてあり。少しも迷うようなことはなく、山坂こそあるものの却つて東京御府内の八十八カ所詣りよりも安心で、たとえ一人旅でも能く分かるので心配は要りません。

安田は遍路道標石を「道おしえの石」と称している。それは遍路道の曲がり角、突き当たり、分かれ道などに立てられた心を込めた石の道しるべである。数多く建てられているため一人旅でも迷うことない。四国八十八箇所の江戸（東京）の写し霊場として開創された御府内八十八ヶ所霊場よりも四国遍路の方が安心であると説く。また、「第三・御四国順拝の道順に附いて」の中で、安心の根拠として、四国遍路の道標石の数について、「面白い例えを紹介している。

○一番の札所までの道しるべの建て石に納め札を貼つて御覧なさい。八十八を百倍した八千八百枚の納め札が入用になるかも知れぬ。驚く程道しるべが沢山あるから安心です。

徳島の撫養などの上陸港から一番の札所までに建てられた道標石に、遍路が札所を巡拝する際に奉納する納め札を貼っていくと、驚くほどの数になる。八十八箇所の札所もあると百倍した八千八百枚の納め札が必要になるかもしれない。

い。とにかく四国遍路には驚くほどの沢山の道標石があるので、道に迷うことなく安心して巡拝することができると説く。

また、近道の道標と道標石の保存活動についても言及している。

○近道の道しるべ、これは石の建てられない山の峰や上り坂下り坂にあるのです。其の道しるべと云うは、先に巡拝した遍路さんが自分々の納め札を木の枝や草に結びつけてあるのです。それを辿ると果たして安全に本道へ出られるのですが、道しるべの石の建てない道へは行かぬがよい。

○途中で、若し道しるべの石が、倒れておるのが眼についたら起こすよう、自分一人で起こされない時は、後から来る遍路さんと協力して起こして下さい。亦自分等で起こされ重い石の場合はやもうえないと云うが一般の通語だになるべくなら眼についた御縁で、金銭を少々ふんばつ喜捨の心で札所へ頼むとか、其の近辺の人に頼んで起こすようにして下さい。

これらの記述は何度も徒歩で四国遍路を行った安田の実体験から導き出された注意書きといえる。道標石のない道は「近道」と標示されていても行かない方が良く、道標石の存在こそが安全な遍路道の証拠であると見なしている。ちなみに明治・大正期に四国遍路を二七〇回行ったとされる中務茂兵衛（亀吉）が明治一六年（一八八三）に刊行した『四国霊場略縁起道中記』にも「近道を案内するとも、猥りに行くべからず。本年も阿波鶴山麓にて追剥せられし事あり、用心すべし」と記され、近道ではトラブルが生じていたことがわかる。

また、道中で倒壊した道標石に遭遇した際は、それを一種の縁と捉え、自力あるいは他者の協力を仰いででも、私財を投じて復元に努めるべきであるという。道標石の維持を遍路の功德や義務として説く、安田の強い願いが反映されている。道標石の修復、復元設置の活動については後述する。

1-9 Alfred Bohner : アルフレート・ボナー著 『Walfahrt zu Zweien, Die 88 Heiligen Statten von Shikoku, Tokyo, 1931』(邦題『同行二人の遍路』) 昭和六年(一九三二)

外国人遍路による道標石への認識については、オーストリア人のアルフレート・ボナー(一八九四〜一九五八年)がドイツ語で著した四国遍路に関する研究書に『同行二人の遍路(邦題)』における記述が注目に値する。

ボナーは大正一一年(一九二二)に来日し、旧制松山高등학교(現愛媛大学)で七年間、ドイツ語の教鞭をとった。日本文化とりわけ宗教に関心があつたボナーは、昭和二年(一九二七)、夫婦で歩き遍路を行い、自らの体験をもとに関係する文献史料や聞き取り調査、さまざまな資料を駆使して、大正末期から昭和初期の遍路の習俗を実証的に詳述した。日本語訳本(佐藤久光・米田俊秀訳『同行二人の遍路―四国八十八ヶ所霊場』)の記述を引用する。

私たちは道標なしに寺院への道を辿ることはできない。幸いなことに信心の篤い人たちがほとんど至る所の、道の曲がり角に道標を建ててくれている。時折発起人の名前と、遍路にとつて都合の良いようにと方向を示した印が付けられている。また、卍(寺を示す印)と方向を示す手を描いた小さな荒石が置かれている。しかし、重要な所には約一メートルの高さの四角い、距離の数字が標示された石がある。碑文やその筆跡は日本の気候の下では大変早く風化してしまいが、どこかのお役所が関わったということもなく、いつも元通りの姿に保たれている。それは遍路に対して大変親切な人たちが、杖と念珠を持つ代わりに、あたかも筆とインク壺を持って、四国中の遍路道を廻るようなものである。

本書には佛木寺道(第四十一番龍光寺〜第四十二番佛木寺)の道標石(写真②)が掲載されている。それは宇和島市三間町の龍光寺からの山道出口に現存する。刻字は「(手印) へんろみち 佛木寺へ廿丁 施主邑中／(手印) へんろみち宇和成家村 いなり山へ五丁／明治十一年戊寅一月建之 世話人 岩倉

宇平（他2名）」とある。<sup>16)</sup> 順打ち・逆打ち双方向を示した手印と次の札所迄の距離表記があり、設置者は地元村民であることがわかる。

外国人のポスターの目に映った四国遍路の道標石は、至る所の道の曲り角に建てられ、道標石がなければ巡拝者は札所に到着できないと述べ、四国遍路における道標石の数量的充実を指摘している。また、道標石には方向、卍印、手形などが記され、重要な場所では距離が標示されている。小さな自然石のものから、背の高い四角い加工石のものなどがある。注目したいのは、道標石の保存修復について言及されている点である。日本の気候下では屋外の道標石は風化が著しく、保存環境は過酷であるが、行政機関に依頼せず、民間の篤志家の奉仕によって修復・維持されていると論じている。

四国遍路における距離表示の道標石といえ、武田徳右衛門の丁石が代表されるがそれについては後述する。

#### 1-4 安達忠一「四国雑話」(『遍路』第四卷第九号) 昭和九年(一九三三)

安達忠一は大阪府弥刀村(東大阪市)在住で「弘法大師御入定一千百年記念法要」の聖年にあたる昭和九年に四国遍路の案内記『同行二人 四国遍路たより』(欽英堂書店)を発刊した。<sup>17)</sup> 本書では道標石に対する見方が具体的にうかがわれる記述は確認できないが、各札所の解説文の「順路」の項目で、次の札所までの距離、道筋や乗合自動車・鉄道等による交通機関の有無・料金などが丁寧に紹介され、その中で道標石は「立石」と表記されている。

道標石(立石)に対する安達の見方が示された文献に月刊誌『遍路』(遍路同行会)に投稿された「四国雑話」に「立石の整理」というトピックがある。

交通機関の発達につれて徒歩主義の遍路にも多少の影響は免れませぬが、又一方には交通機関に恵まれて遍路の形態が擴大されるといふことも考へられます。然し何んと言つても遍路の妙味は徒歩にありまして、此場合遍路者の最も頼りとするのは立石で、現在至所四国ならではと思はれる位岐路に立つていきます。然しその親切も煩に流れて一ヶ所に五十町一里の昔のものや新

しい處では料(キロメートル)まであります。さうして各揭示の里程に相違があつたり、中には米突法に換算して誤りがあつたり、甚だ混沌たるものがあります。此等は本年の御遠忌記念事業として昔のものは保存に努め他は整理の上札所等で一定の規格を定め、科学的測量に依つて正しく統一したものを立てられては如何かと思ひます。<sup>18)</sup>

交通の発展によつて徒歩主義の四国遍路にも多少の影響が生じている。安田は四国遍路の趣は徒歩で行うことであつて、遍路が最も頼りとするのが立石(道標石)である。それは至る所の岐路に建てられ、四国ならではの光景と捉えている。しかし、そうした親切心から建てられた立石であるが、一箇所に新旧の立石が立ち並ぶことの弊害を指摘している。江戸時代は国ごとに里町が異なり、<sup>19)</sup> そうした古い立石と近代のメートル法に基づく新しい立石が併存し、距離表記の不一致や距離の間違いなどが散見され、遍路道における距離認識に大きな混乱を招いていたことが伺える。

安達はそれを解消する策として、弘法大師御入定一千百年記念事業の一環として古い昔の歴史的な立石は保存に努めて他は整理する。札所寺院等で一定の規格を定めて、距離表記の正確を期するため科学的測量に基づく統一した立石を整備することを提案している。

安達は歴史的な道標石の存在の多さ、それら設置者への感謝の気持ちを持ちながらも、実際に巡拝する遍路が混乱しないように、現存する道標石の保存と整理、そして統一した新規格の道標石の必要性を説いている点が目される。

#### 1-5 高群逸枝『お遍路』 昭和十三年(一九三八)

熊本県下益城郡豊川村(宇城市)出身の詩人、女性史研究者の高群逸枝(一八九四〜一九六四年)は大正七年(一九一八)、二四歳の時、約半年をかけて四国遍路を行っている。巡礼先から書き送られた手記は「九州日日新聞」に連載されて好評を博し、昭和五四年(一九七九)に『娘巡礼記』として刊行された。高群が四国遍路を行ったのは大正七年の一度のみであったが、その二〇年後の

昭和十三年（一九三八）に刊行された『お遍路』は、先行する『娘巡礼記』とは異なり、当時の納経帳や備忘録をもとに新たに執筆されたものである。さらに昭和十一年（一九三六）発行の『四国霊場大観』などの諸資料を参考に、札所に関する情報を加え、四国遍路の案内書としての機能を具備している。<sup>(20)</sup>

本書の「伊豫（下）」では、道標石の挿絵入りの「道標」と題したトピックを紹介している。

辻々には例外なく石のしるべがたつている。順逆を示すに手形を描いているのは微笑ましい。その文字も稚拙揃すべきものが多い。明和四年再板の『四国徧禮道指南増補大成』に、『此の道しるべのなれることは、真念法師五相三密の繩牀を出て、南海千里の金場を踏れしに、多岐羊腸脚のきもを冷し、杳かに人家なくして岩もる水に枕をかたむけ、遠く客舎を絶ては山を帯ふ雲を志と禰とせられしま、に迷方をあわれむこ、ろ切にして、再び三度葛藤をめぐらし、谷ふかく又濱をつくし、聞いて書き見て知るされ、九九にあまり、寺号、村つつき、道の遠近をいちじるしく一巻の珍（珠）となりぬ。これを梓にことぶきしてあまねく扶桑に施さんとせられし、衣鉢の外に余長なく、むなくやみなんことをかなしまれけるに、大阪野口氏、寶財を大師の恩海にあげられしかば、終に求願事なりぬ。』とあつて、次に、『二、巡禮の道すぢに迷途おほき中ゆへに、十方の喜捨をはげまし標石を立おくなり、東西左右のしるべ、並施主の名字彫刻入墨せり。年月を経て文字おちなば遍路の大徳並に其わたりの村翁再治仰ぎ奉る所なり。』とあるのを見れば、随分古いものもあるわけであらう。山の中、野の中に、ひとり行き暮れた盲人でも、この道標を撫で、方向をあやまらないなど、きくのはあはれ深い。

高群は道標石をどのように見ていたのか。遍路道では至る所で例外なく道標石が建てられている。道標石には順打ち・逆打ち双方を示した手形が微笑ましく、文字も稚拙で味わい深いものが多いと述懐している。そして、道標石の歴

史を紐解くかのように、江戸時代後期に増補改訂版として流布した『四国徧禮道指南増補大成』に記載された真念法師による道標石に関する一節を引用している。<sup>(21)</sup> 引用文は四国遍路案内記の嚆矢とされる貞享四年（一六八七）の真念『四国邊路道指南』の序文を踏襲している。

引用文の最初は、南海道の四国の地は「多岐羊腸」（羊の腸のように細かくてグニャグニャしていて、絡み合って分かれ道の多い道）で多くの遍路が道に迷うのを哀れみ、真念法師は何度も道を調べて本書を記したこと、大阪の野口氏が資産を投じて出版できたことなどが記されている。次の引用文には真念が建てた道標石について記されている。なお、真念自身はこれを「標石」と称している。稲田道彦氏による現代語訳では「巡礼の道筋には迷いやすい所が多いので、方々の人に喜捨をお願いして、標石を建てておきました。東西左右を示す文字と喜捨をしてくださった施主の名字を石に彫刻し墨を入れておきました。年月がたつて字の墨が消えてしまった時には奇特な遍路や、標石のある村の古老が再び墨を入れてくださることをお願いするところでありませう。」と紹介されている。

真念の道標石については後述するとして、こうした江戸時代の案内記の記述を引用して、高群は四国遍路の道標石の中には相当古いものが存在することを指摘している。また、行き暮れた視覚障がい者が手形のある道標石を撫でることとで進路を確かめたという伝承にふれ、そこに深い感慨を覚える旨を述べている。

### 1-6 宮尾しげを『画と文 四国遍路』昭和十八年（一九四三）

東京出身の漫画家で随筆家の宮尾しげを（一九〇二—一九八二）は、昭和十八年に遍路記『画と文 四国遍路』（鶴書房）を刊行した。自序によると「これ（四国八十八箇所めぐり）は大師の偉大なる精神力の発露である。しかし現在に於てはその大師の精神を忘れ、選ばれた寺も信者もその意を以て衣食の糧にしている不愉快さを見る事が出来る。私の遍路行はその不愉快さを除いた大師の偉大なる発案のまゝ、を踏習してみた。しかし昭和の御代であるので、少時

間的に遍路行をする事が出来る方法として乗物の便を大いに利用した事だけは大師の発案に反する次第である。しかしこれは近代的遍路者の為の参考に資したい為も含んでいるこの點は諒されん事を。」と述べている。<sup>23)</sup>

宮尾は弘法大師の精神を忘れた一部の四国霊場の札所寺院や信者に不愉快さを感じながらも、第一番霊山寺から順打ちで四国霊場の巡拝を行い、乗物の便を積極的に活用している。

漫画家であった宮尾は本書の中に順拝中の光景などを描いた挿絵を多く収録している。それらの中には、大正五年（一九一六）に龍光寺参道の鳥居前に中務茂兵衛が建てた順打ち・逆打ち対応の手印付の道標石、繁多寺道の「左御城下道、（手印）右へんろ道」と刻まれた道標石、栄福寺道の総社川近くに建てられた「（手印）へんろ道」と記された道標石（写真③）、三角寺奥院道の「左奥之院へ六十五丁堀切峠ヲ経テ奥ノ院ニ至ル」と刻まれた道標石などが描かれている。<sup>24)</sup>

本文では、道標石を「標石」「路標」「道しるべ石」などと表記している。そして、宮尾が実際に遍路道を歩いて道標石に接した感想を述べている。第二番極楽寺道で次の一節が記されている。

遍路の通る路々には、間違はぬ様に、曲り角とか、三角點とか、まごつきやすき地點には必ず道しるべ石が立っている。石に格好の悪い手つきが、盲目でない限りは方向の判る様に刻まれている。

また、土佐の国分寺道で「村の路標案内が右を左と反対の悪戯がしてある」事例の紹介、繁多寺道では「『左御城下道、右へんろ道』の大きな標石は相当古さう。」など、道中で見た道標石の感想を随所に述べている。

前述の通り、宮尾は四国霊場の一部の札所寺院や信者が弘法大師の精神を忘れて信仰を「衣食の糧」としている現状に批判的な眼差しを向けている。その一方で、遍路道では道を間違わないように必ず道標石が立てられていることに感心している。方向を指し示す手印や手形が刻まれた道標石について「格好の

悪い手つき」と評し、触察に依拠せざるを得ない視覚障がい者に対する情報提示の不完全さを指摘している。

#### 1-7 橋本徹馬『四国遍路記』 昭和二五年（一九五〇）

愛媛県西条市出身の政治家・思想家の橋本徹馬（はしもと・てつま）が昭和二五年（一九五〇）に発行した『四国遍路記』は、戦時中の昭和一六年（一九四一）に行った四国遍路の日記をもとに、札所の縁起等の解説は安達忠一『同行二人 四国遍路たより』を参考にして作成された案内記である。橋本は日中戦争の早期解決や対米開戦の回避などを目標に活動した。はしがきに「無理な戦争の為に、祖国が地獄道を驀進して行く惨状を眺めながら、最早施す手段も尽きて、悲痛な気持ちに浸りながら遂行した遍路の日記であるから、その心して読まれたい。（中略）誤れる戦争に伴ふ悲劇の深刻なるを知るべしである。」とあるように、本書の性格は一般的な案内記類とは一線を画している。戦禍へと突き進む混乱の時代にあつて、橋本が悲痛な決意をもって四国遍路を行った時の記録であり、戦争によって生じた悲劇の深刻さについても鋭く言及されている。<sup>25)</sup>

ジャーナリスト・政治家で後に第五十五代の内閣総理大臣となった石橋湛山が寄せた「四国遍路記推薦の辞」には、「この遍路記が、単なる旅行家の旅行記でないことである。著者橋本君は太平洋戦争中、祖国に献身せんとして、行動の自由を奪われた。著者の憂国の至誠はここに遍路の形をとり、国家生民の幸福のため、熱き祈願の旅を続けしめた」とある。橋本のように行動の自由が制限され、郷里で遍路の身となり、戦争がもたらす悲劇を痛感しながら、国家と国民の幸福を願って四国霊場順拝を行なったという事例は大いに注目に値する。<sup>26)</sup>

本書はこうした特色のある遍路日記のため、随所に橋本独自の四国霊場や四国遍路に対する考え方が示されている。道標石については「立石」と表記し、次のトピック「面白くない立石」（法輪寺道）、「妙な立石」（大寶寺道）、「売名に似た立石」（大寶寺道）が記されている。

【面白くない立石】大通りへ出て右へ数丁行つた處に大きな立石があつて、左に曲がる遍路の指差しがある。そうして其指差しの下には、何やら大きな字で彫りつけてあるのが見えるから、それを読めば法輪寺への道程などが分るのであらうと思ふて近よつて見ると、何ぞ凶らん、そこには『阿波國何郡何村 施主何某』と深々と彫り込んであるのが見えるだけであつた。どうも面白くない……此立石を建てた人は、勿論遍路者の為めを思ふて建てたのであらうが、若しそうであれば、施主の住所姓名をこんなに大きく彫り込む代りに『之より法輪寺へ何丁』、『此向ふ何丁の處にて右又は左へ曲つて更に何丁』とか云ふ様な文字を彫り込むべき筈ではあるまいか。然るに此立石の有様では、此人は道標を建てることによつて、売名をして居るのではないかと思はれるのが気の毒である。総てこの立石に限らず、阿波國で見た立石や寺の石垣、階段其他には、最も無遠慮無作法に、施主の名を大きく彫り込んだのが多かつたのは、苦々しい事であつた。勿論寺や佛事に就て何かの布施をする人は、全然せぬ人よりは善いにきまつて居る。然しその人達が若し一切売名的な感じを与へぬやうにしたならば、其功德が更に大きいであらうに、氣づかぬ為めであらうが、売名的な感じを与へるが為めに、折角の善行が死んで終ふのは気の毒であると思ふのである。<sup>29)</sup>

【妙な立石】久万町へはもう直ぐと云ふ處で、不図右手を見れば、道端に小さな見落としそうな立石がある。指先が両方を指して居る處は、正に遍路の道標の印であつて、そこには細道の方へ上がる處があるが、大寶寺は久万町へ入つてからであると言ふ先入観を持って居た僕は、これは何んの印であらうかと思ひながら立寄つて見ると、彫りつけた指さしの下に、左の通りの文句が彫りつけてあつた。四國順拜八十八度目為供養 之は中央の文句で、更に其右肩の處へ、昭和三年六月と彫りつけ、左下の處へ、姓名と、僧名を彫りつけてある。「之れはどうしたと云ふのか」指さしは正に遍路の道の印であるが、一体此大通りから入つた小さな道に、何があると云ふのであらう。四國順拜八十八度目供養の為めに、立寄る人には茶でも上げると云ふのであ

らうか。幸ひ僕は急がぬ身だから、寄り道でもよい行つて見ようと思ふて、半丁ばかりその細道が上がつて行くと、豈は計らんや、そこが自分の目指す四十四番の大寶寺であつた。<sup>30)</sup>

【売名に似た立石】「オヤ之れは行過ぎては大変であつた。僕は全くあの立石のお陰で道を間違はなかつたのであるから、大いに感謝しなければならぬであるが、それにしても立石が餘りに小さく、その上文句が不親切なやうである。若し四國順拜幾度目などと書く代りに、此上大寶寺とでも書いて置いてくれたら、どんなに遍路者を迷はさずに済むであらう」。立石を布施する人々の態度に、豫々眉をひそめて居る僕は、ここでも少々苦々しさを感じた。殊に八十八度も四國を順拜した僧侶なら、尚ほ更ら遍路者の便利本位に石を立てるべきである位の事は、分かりそうなものだ。それが分からぬやうなら、何の為に八十八度も遍路をしたのであらうか。<sup>31)</sup>

橋本が指摘する「面白くない立石」とは、遍路が進む方向を示す指印の下に、遍路にとつて必要な距離等の情報は記さずに、大きな字で深々と彫られた施主の住所・氏名がある道標石を指す。また、道標を設置することは施主の売名行為であると勘違いされるのが気の毒であり、それが理解できないのは「何の為に八十八度も遍路をしたのであらうか」と苦言を呈している。道標石のみならず札所の石垣や石段などに刻まれた施主名についても顕示性を抑えれば功德はより深まるはずであり、せつかくの善行が台無しになるのは残念であるとの見解を述べている。

橋本がいう「妙な立石」とは、方向を示す指印の下に「四國順拜八十八度目為供養」と記し、年月、姓名、僧名が刻まれ道標石を指す。道行く遍路にとつて必要な情報を記さずに巡拝回数を記すのは、「四國順拜八十八度目供養の為めに、立寄る人には茶でも上げると云ふのであらうか」と皮肉を交え、自己満足に終始する建立姿勢を厳しく批判している。注目したいのは「指先が両方を指して居る處は、正に遍路の道標の印」と認識されている点である。道標石に

指印があり、順打ちと逆打ちの双方方向を示しているのが四国遍路の道標石の特色であると捉えている。ちなみに橋本が事例として採り上げた道標石は大寶寺道に現存する(写真④)。

「売名に似た立石」とは「妙な立石」の続きの一節である。結局、橋本はその道標石のおかげで道に迷わず大寶寺にたどり着いたのであるが、道標石の適切な大きさ、遍路にとって有益な情報提示の在り方など、道標石を寄進する者の姿勢を問うている。とりわけ設置者が僧侶であるならば遍路の利便性を最優先に道標石を立てるべきで、それが理解できないのなら「面白くない立石」同様に「何の為に八十八度も遍路をしたのであらうか」と修行の真意を問う批判を展開している。

以上、戦前の昭和期に四国遍路を行って、案内記類を発表した島浪男、安田寛明、アルフレート・ポナー、安達忠一、高群逸枝、宮尾しげを、橋本徹馬、七人の道標石に関する記述を紹介した。様々な立場の筆者が実際に四国遍路の道中で見た道標石をいかなる視座で捉え、評価していたのかを明らかにした。

## 二 四国遍路の道標石の系統

次に、案内記類の作者たちが四国遍路の道中で遭遇したであろう主な道標石の特徴を概観する。本稿では各時代の代表的な道標石の設置者に着目し、江戸時代前期の真念、後期の武田徳右衛門、明治・大正期中務茂兵衛、および四国遍路の道標石に多く見られる手印・指印入りの道標石を指標として、四国遍路の道標石を四つの系統に分類・整理した。

### 2-1 真念の道標石(写真⑤)

高群逸枝は『お遍路』で江戸時代の四国遍路の案内記『四国徧禮道指南増補大成』を引用して真念の道標石を紹介した。

真念は江戸時代前期の僧で大坂の寺島(大阪市西区)を本拠として、四国遍路を二〇回以上行ったとされる。現存最古の四国遍路ガイドブック『四国邊路

道指南』を貞享四年(一六八七)に刊行、遍路の休憩・宿泊所として真念庵の開設、迷いやすい遍路道の分岐点に道標石(真念標石)を二〇〇基余り建てるなど、江戸時代前期における四国遍路の普及に多大な貢献をした。

現存数が少ない真念道標石の特徴として形状は角錐形で、後世の道標石に比較すると小ぶりなことがあげられる。案内表示は道標石の正面上部に分かれ道の方向「左・右」を示し、中央に「遍ん路みち」、下部に「願主真念」と刻まれているものが多い。左側面は「為父母六親」、その下に道標石を設置するために浄財を寄進した施主の在所と名前を記す。六親とは最も身近な親族や親族全体をさす。右側面には「梵字(𑖀𑖃𑖫𑖞)」「ア」南無大師遍照金剛」と大師の御宝号が刻まれ、弘法大師を称えている。

### 2-2 武田徳右衛門の道標石(徳右衛門丁石)(写真⑥)

アルフレート・ポナーや安達忠一らが距離を標示した道標石に注目しているが、江戸時代の四国遍路で距離表記の道標石を四国中に設置したのは武田徳右衛門である。

伊予国越智郡朝倉村(愛媛県今治市)出身の武田徳右衛門は、真念から百年余り時代が下った寛政から文化年間にかけて、道標石の設置、遍路道の整備に尽力した。徳右衛門の道標石の特徴は、正面に梵字(𑖀𑖃𑖫𑖞)「ア」が多い」と弘法大師像を配し、その下部に「是より〇〇迄〇里」と案内表記があり、次の札所までの里数(距離)を明記する点にある。古くから特定の聖地や霊場までの距離を一定の間隔で表す石造物(丁石)のスタイルに似ているため、「徳右衛門丁石」とも呼ばれる。右側面には施主、左側面には願主を刻んでいる。形態は角柱で頭頂部がアーチ状の蒲鉾型が多い。徳右衛門が道標を建立した背景には、わが子たちが相次いで亡くなり、亡き子の菩提を弔うために四国遍路の旅に出かけたことが要因とされている。建立時期については年号が入っていないものがほとんどで定かでないが、寛政六年(一七九四)に発願し、文化九年(一八一二)まで建立に関与していたと考えられている。

武田徳右衛門による道標石の建立については、喜代吉榮徳氏が寛政六年(一七

九四)の勸進記録簿「町石勸進代舌」の存在を指摘している。この史料は、第五十八番佐山仙遊寺住職天尊が道標設置のために行った勸進の実態を伝える貴重な記録である。それによると、遍路の増加にともない、遍路道の距離が不明であった従来の標石にかわる、弘法大師像を掲げて距離を記載した五尺の町石を霊場に設置するための勸進を行っていることがわかる。<sup>(35)</sup>

四国霊場の札所や遍路道の要所に建てられた武田徳右衛門の道標石は後世に新しい情報が追刻されるなど、近代以降にも再利用されている。

### 2-3 中務茂兵衛の道標石(写真⑦)

橋本徹馬は四国遍路の順拝回数等の個人的な情報を刻んだ道標石について批判的であった。その代表が中務茂兵衛の道標石といえる。

明治時代に入り、四国中に数多くの遍路道標を建立した中務茂兵衛(一八四五―一九二二、本名亀吉、法名義教)は、四国霊場を二八〇回も巡拝し、人々に生き仏として慕われた。茂兵衛の道標の特徴は、建立年月と「〇〇〇度目為供養 周防国大島郡椋野村 願主 中務茂兵衛」などと表記され、先祖供養を願い、自身の巡拝回数が刻まれている点にある。これまでの他の道標石に比較して大型で、遠くからでも目に付く。案内方法は、手形や指差しにより、順・逆双方向に対応している。文字は二面・三面に刻まれているものが多いが、四面に刻んでいるものもある。これらの中には、自作の和歌や俳句、番外霊場の案内や遍路土産の広告などが刻まれたものもあり、江戸時代の道標石に比べて情報の多層化が進んでいる。施主の出身地は全国に広がり、また、一基に多数の施主名が刻まれているものも多く、茂兵衛の知名度の高さや全国的な弘法大師信仰のネットワークを示している。明治以降、近代化によって道路交通事情が急激に変わっていくなか、遍路の達人であった茂兵衛は、古来の遍路道を継承しながらも、自らが率先して新しい時代の遍路道と遍路道標を整備し、近代四国遍路の普及、発展に多大な貢献をした。<sup>(36)</sup>

### 2-4 手印・指印を刻んだ道標石

島浪男、アルフレート・ポナー、宮尾しげを等が注目する手の形を彫り出して方向を示した道標石は、陽刻(浮き彫り)・陰刻などの技法によるもので、形状は手印や指印など様々なスタイルがある。中でも高知県安芸郡田野町にある自然石を用いた道標石(写真⑧)の刻字は「(手印) 此手四国中へ何百有之ミなへんろ道 肥前五嶋 福江川のや政吉」とあり「手形石」と呼ばれている。川のや政吉は五島列島の福江島(長崎県五島市)出身とされるが詳細は不詳である。<sup>(37)</sup> 上部にあるような手形を四国中の遍路道に何百と刻んだと考えられている。政吉の手形石と見られる道標石は観自在寺道(愛媛県南宇和郡愛南町)などでも確認されている。<sup>(38)</sup>

また、島が特に注目した「頗る原始的な指差しの恰好などが描いてあるだけ」という道標石は、進むべき方向を指示した手形のみシンプルな道標と考えられる。愛媛県今治地方の遍路道などに同様な道標石が確認できる(写真⑨)。小さな自然石でできた手形石は別の場所に移動させることは容易であり、文字情報が一切記載されていないため汎用性は広く、道標石の成立・発展過程を考察する上で重要な示唆を与えている。<sup>(39)</sup>

手印がある現存する道標石の中で最も古いものは、四国八十八箇所霊場第四十七番八坂寺近くにある、四国で二番目に古いとされる貞享二年(一六八五)三月の紀年銘入りの安山岩製の道標石で、素朴な線刻による手印が刻まれている(写真⑭―⑮)。真念の道標石の「左」の文字の上に指印を改刻して内容を修正している事例(写真⑤―⑬)も確認できる。また、文化年間頃、阿波を中心に照蓮が建てた道標石は、「四国中千鉢大師」「真念再建願主照蓮」と記され、弘法大師像の上部に指印が刻まれているのが特徴である。真念の道標石を再建し、四国中に千体の弘法大師像の道標石を設置することを目指したもので、道標石において手印・指印と弘法大師像が一体化された事例として注目される。近代に入ると、前述した中務茂兵衛の道標石のように、手印・指印が多用されている。これらの事例は、手印・指印が案内指示の方法として普及する過程を考える上で大いに注目される。

### 三 道標石から見た四国遍路の特質

第一章で実際に四国巡拝を行ったさまざまな立場の七人の作者が著した案内記類から、道中で出会った道標石をどのように捉え、評価していたのかを明らかにした。本章では案内記類の分析から得られた知見と、これまで筆者が行った四国遍路の道標石の実地調査成果を援用し、道標石の特色、および道標石から見た四国遍路という巡礼の特質について考察したい。

#### 3-1 驚くほど沢山の道標石

「四国巡拝の旅では徒歩を本領としてゐるだけに、流石に道路標は完全だった」「四国巡拝の旅では殆んど道に迷ふと言ふ事はないと言ってよい位だ」（島浪男）、「驚く程道しるべが沢山あるから安心です」（安田寛明）、「道標なしに寺院への道を辿ることはできない」（アルフレート・ポナー）、「遍路の妙味は徒歩にあります、此場合遍路者の最も頼りとするのは立石で、現在至所四国ならではと思はれる位岐路に立っています」（安達忠一）、「辻々には例外なく石のしるべがたつている」（高群逸枝）、「遍路の通る路々には、間違はぬ様に、曲り角とか、三角点とか、まごつきやすき地点には必ず道しるべ石が立っている」（宮尾しげを）。

遍路を体験した多くの作者が共通した見解として、四国遍路という巡礼では道標石が至る所に建てられて道に迷うことがないという点である。

こうした背景には、四国遍路が基本的に徒歩による巡礼であるという点に加え、平野が少なく山間部が連なる四国の地理的環境があげられる。また、八十八箇所という札所の数が多いが、著名な大寺院は限られており、その大部分が小規模な寺院で構成されているという実態も影響していると推察される。真念が記すように四国遍路は「多岐羊腸」で、遍路道は分かれ道や曲がりくねりが多いという巡礼環境に成立している。また、四国の上陸港や安芸の宮島へ渡る港と遍路道をつなぐルート（写真⑩）、橋のない河川（写真⑪）や湾内を渡る際の両岸、近代以降の新道開通による新しい遍路道の形成（写真⑫）、最短ル―

トを示す近道の案内（写真⑬）など、時代の変遷や交通環境の変化などに伴って必要な道標石が設置・整備されてきた。こうした理由が四国遍路に道標石が驚く程多く建てられてきた要因の一つと考えられる。

旅行家で全国各地を旅した島浪男が「流石に道路標は完全だった」と述べているのは四国遍路という巡礼の特質を示している。

#### 3-2 心を込めたお接待としての道標石

「曲り角とか岐れ道にある石の道路標は、その土地の人達かと、又は他府縣の所謂篤信の士が建てたもの」「先人の後人に対する親切の現れなのだ。——いや、親切と言ふよりは、寧ろさうする事が先人の後人に対する義務なのかも知れない」（島浪男）、「曲がる所、突き当たる所、或いは岐れ道の所などには心を籠めた石の道しるべが三本も五本も並べてあり」（安田寛明）、「幸いなことに信心の篤い人たちがほとんど至る所の、道の曲がり角に道標を建ててくれる」（アルフレート・ポナー）。

驚く程にたくさん建てられた四国遍路の道標石は、巡礼者（遍路）が道に迷うことなく巡拝ができるように配慮した寄進者たちの、厚い信仰心と献身的な親切心の結実であると評価している。道標石の設置は願主・施主・世話人・石工など関係者による善意によって行われ、弘法大師信仰の結晶ともいえる。四国遍路における信心とは、特定の宗教や宗派に留まらず、神仏への崇敬と弘法大師空海への帰依を基盤とするものである。その中核をなす大師信仰には、高野山奥之院で入定した弘法大師が弥勒菩薩の下生を待ちつつ衆生を救い続けるという「弥勒下生」の思想、遍路は常に弘法大師と共に巡礼を行っているという「同行二人」の意識、遍路を弘法大師の化身と見なして、無償の施しを行う「お接待」の文化が息づいている。道標石は「同行二人」の遍路に対して道案内する「お接待」の行為であり、遍路道における常設の接待といえる<sup>⑭</sup>。

#### 3-3 見て触れてわかる道標石

四国遍路において手印（写真⑭）や指印（写真⑮）を刻んだ道標石の存在が

注目されているのは特筆に値する。「必ず浮彫で手の形を彫り出して方向を示してあつた」「手の形が浮き出しになつてゐますから、たとへ盲でも、あれを探つてみては先途々々で行けるわけです」「實際的に言つて、それ等が果して盲通路にどれほどの役に立つかは知らないが、単に右何番道、左何々寺道など、せず、わざ／＼手の形を浮き出しにしてあるのは理想はそこにあるのだろう。兎に角かうした形式の道路標は他では見られないものだ」(島浪男)、「通路にとつて都合の良いようにと方向を示した印が付けられている」「方向を示す手を描いた小さな荒石が置かれている」(アルフレート・ポナー)、「順逆を示すに手形を描いているのは微笑ましい」「ひとり行き暮れた盲人でも、この道標を撫で、方向をあやまらないなど、きくのはあはれ深い」(高群逸枝)、「石に格好の悪い手つきが、盲目でない限りは方向の判る様に刻まれている」(宮尾しげを)。

現存する手印・指印入りの四国遍路の道標石については前章の道標石の系統で紹介したが、日本各地を旅行している島浪男がこうした形式の道標石は他では見られないと語っている点は大いに注目される。その理由として、高群逸枝が「盲人でも、この道標を撫で、方向をあやまらないなど、きく」と記しているように、当時の四国遍路においてよく言われていることが、浮彫りの手形のある道標石は目の不自由な遍路であつても触れることで進む方向が分かるためとされている。

ただし、島や宮尾が疑問視するように、実際に視覚障がい有する遍路にどれだけの効果があつたのかは不明といえる。むしろ、そうしたことが言われているのは、島が阿波(鶴林寺・太龍寺間)や伊予(四十何番)の遍路道で視覚障がい者の遍路に出会っているように、当時の四国遍路に障がい者や病人が数多く見られた事実は、弘法大師の霊験への期待を裏付けるものである。これは、四国遍路が社会において、医療では完治し得ない難病をも救済し得る聖域として認識されていたことを示唆している<sup>(4)</sup>。

手印・指印入りの道標石は、仮に文字が読めない人であつても図像として遠くから見ると目立ち、一目瞭然でわかりやすい。

手印・指印の案内デザインは願主・施主の意向や造り手の石工の創意工夫によつて造形され、各地に広まったものと推察される。手印・指印には皺、関節、爪などの細部をよりリアルに表現したものや、人差し指の長さや大きさをデフォルメして目立たせているもの、手首に袖(和服の袖や軍服のような袖等)が付いたものも見受けられる。遍路が迷わないようにより分かりやすいビジュアルな道標石の制作は接待心の反映ともいえる。手形のみ刻まれたシンプルな道標石はポータブルとして設置場所の移動も比較的容易であり、汎用性のあるユニバーサルデザインといえる。

### 3-4 順打ち・逆打ちに対応した道標石

「指先が両方を指して居る處は、正に遍路の道標の印」(橋本徹馬)と指摘されている。四国遍路で手印や指印が付いた道標石が数多く存在する理由の一つといえる。なぜならば、四国遍路の巡礼の特色の一つとして、札所番号順に順拝する順打ち(時計まわり)と、結願所から逆に初願所まで順拝する逆打ち(反時計まわり)という巡拝方法がある。逆打ちは地形的にも順打ちより険しく、逆打ちに対応した道標石も少ないため、逆打ちが成就すればより大きな功德を得られると考えられている。「遍路の元祖」とされる衛門三郎伝説では、弘法大師に懺悔するために順打ちで二十度巡拝を行なったが大師に会えず、最後に行つた逆打ちによつてついに大師に出会い、願いが叶つたと伝えられている。

順・逆双方の巡礼者に対する交通整理の案内標示として、視覚的効果の高い手印や指印を刻んだ道標石は機能的であつたと考えられる。前述したように、明治・大正期の四国遍路の道標石の代表格と言える中務茂兵衛の道標石の多くは順・逆双方に対応した手印や指印が示されている。

道標石に刻まれた案内表記は「ぎやくへんろ道」「逆邊路道」などと文字で記されたもの(写真⑬)、手印と指印を使って順・逆の方向を示したものの、双方向を示す指印が合体してリボンのような形に見えるものなど、その案内表示にあたり様々な工夫が施されている。

### 3-5 巡拝度数を記した道標石

「四国順拜幾度目などと書く」「施主の住所姓名をこんなに大きく彫り込む」（橋本徹馬）とあり、四国遍路の道標石には巡拝度数や施主の住所氏名を目立つように記したものがあつた。中務茂兵衛の道標石（写真⑦）がその代表といえる。橋本がそうした道標石は善行を台無しにする売名行為ではないかと批判的な見解を示している。四国遍路は一直線に進む巡礼でなく、人生のサイクルのように四国を円を描くように八十八箇所を巡るといふ円環的な巡礼である。巡拝の開始は第一番からでなくとも巡礼者の居住地あるいは上陸した港近郊の最寄りの札所から始めることができ、結願後にお札参りとして巡拝を開始した札所に再び参拝する遍路も見られる。また、前述した衛門三郎伝説のように、四国遍路を何回も繰り返して行く多次数巡拝については、真念『四国邊路道指南』に二十七度巡礼した道休禪師や元禄三年（一六九〇）の真念『四国遍礼功德記』に各地の篤志家による多次数巡拝した敬虔な遍路が紹介され、古くから多次数巡拝は行われていたことがわかる。

大寶寺道の鴛田峠（久万高原町）の頂上に建つ嘉永四年（一八五二）の道標石には「梵字」嘉永四年 奉納四国四十大願成就防州上岡平尾実山／村安全 馬酔谷辰右エ門佐吉 野尻村右エ門源内／是より菅生山江三十三丁」とあり、幕末期に四〇度巡拝した遍路が設置したものである（写真⑱）。

現在でも遍路が札所に奉納する納め札は巡礼の回数で色を変えているように、四国遍路において巡拝度数はより功德を積んだ証として重要視されている。こうした四国遍路の巡礼の特質が巡拝度数入りの道標石が造られた要因と考えられる。

### 3-6 弘法大師の道標石

四国遍路の道標石には弘法大師像が刻まれているものがある。代表的なものは、前述した武田徳右衛門丁石である。標石の上部に梵字と弘法大師坐像を刻んでいるものが多い。道標石に刻まれた弘法大師像は、椅子形の牀座に坐し、右手に五鈷杵、左手に念珠を持つ。足元には木履、水瓶を配する典型的な構図

をとる。この図像は大師が高野山奥之院に入定される前に弟子の真如親王が描いたと伝えられる弘法大師の代表的な御影「真如様」である。道標石において大師像を立体的に表現するために表面をくぼませて彫りこむ陰刻、石面より文様や文字を浮き上がらせて彫る陽刻（薄肉彫り、半肉彫り）の技法が用いられている。また、「丸彫り」の技法で造られた弘法大師の石仏の光背に遍路道の方角指示を刻んだ道標石、修行僧姿の大師像（修行大師）を掲げる道標石、線の輪郭で絵画的に描写する「線彫り」の弘法大師像など多様である（写真⑲）。

弘法大師像をもつ道標石は欠損して後世に道案内の機能を失ったとしても、大師像がある石仏として信仰され、地域で祠などに祀られている（写真⑲）。元来、四国遍路の道標石の先駆的存在として位置付けられる江戸時代前期の真念標石において、側面に弘法大師を称える「梵字」南無大師遍照金剛の御宝号が刻まれていることから、四国遍路の道標石には大師信仰が内包されている。江戸時代後期になり、札所寺院で大師堂が建立・整備されていく中で、道標石にも弘法大師信仰を視覚的に表現した浮彫りなどの高度な技法によって大師御影が彫られ、道標石の形状も弘法大師の道標としてより大きく発展したものと考えられる。

近年、四国遍路研究家の喜代吉榮徳氏が弘法大師空海の御手判をめぐって長年の研究成果をまとめた<sup>(45)</sup>。四国霊場に伝わる版木、納経帳の御朱印、護符、案内記などに記された様々な図像による空海の手形、御手判については今なお謎が多いが、四国遍路の道標石に見られる手形石は空海の御手判として位置付けている点は注目される。

### 3-7 善意のリレーで繋ぐ道標石

「先人の後人に対する親切の現れ」「先人の後人に対する義務なのかも知れない」（島浪男）。「若し道しるべの石が、倒れておるのが眼についたら起こすよ、自分一人で起こされない時は、後から来る遍路さんと協力して起こして下さい」「なるべくなら眼についた御縁で、金銭を少々ふんばつ喜捨の心で札所へ頼むとか、其の近辺の人に頼んで起こすようにして下さい」（安田寛明）、「碑

文やその筆跡は日本の気候の下では大変早く風化してしまうが、どこかのお役所が関わったということもなく、いつも元通りの姿に保たれている。それは遍路に対して大変親切な人たちが、杖と念珠を持つ代わりに、あたかも筆とインク壺を持って、四国中の遍路道を廻るようなものである」(アルフレート・ポナー)、「昔のものは保存に努め他は整理の上札所等で一定の規格を定め、科学的測量に依つて正しく統一したものを立てられては如何かと思ひます」(安達忠一)。

四国遍路の道標石の設置は先人の後人に対する親切心で義務であると捉えている。道標石が倒れているのを見かけたら、安田寛明は自力・他力を問わず、札所や地元の人々に協力依頼して努めて復旧させることを呼びかけている。アルフレート・ポナーは、日本の気候条件下で道標石が風化し、刻銘が判読不能となる現状を憂慮しているが、公的な行政機関でなく遍路を大切にしている民間の有志によつて修繕がなされている実態を指摘する。こうした連綿とした道標石の設置・保全活動は前述した真念『四国邊路道指南』で「年月を経て文字おちなば遍路の大徳並に其わたりの村翁再治仰ぎ奉る所なり。」と記すように、真念以来の自発的な奉仕によつて継続されている「善意のリレー」で維持されている。

また、安達忠一はさらに一歩踏み込んで、先人から受け継がれてきた様々な道標石が建てられていた中で、例えば古い歴史的なものは保存に努め、それ以外は整理する。距離表記は科学的測量に基づいた統一した規格の道標石を設置することを提案している。昭和時代(戦前)において、四国遍路の歴史的な道標石の保存の必要性を唱えた安達の主張は、先駆的な意義を持つといえる。

ところで、道標石の修繕について、昭和十三年(一九三八)の「遍路日誌」に「道しるべを書く人」と題した興味深い記事がある<sup>46</sup>。

墨で何にでも矢印を書いたものがあつて、どれだけ便利だか別らない、遍路季節が来ると、村々の青年達でもやるのであらうと思つていたが、土佐で卅一番の竹林寺より、卅二番禅師峯寺へ行く途中であつた、向ふの方で大柄

な男の乞食遍路が屈んでいる、何をしているのかと思つて見ていると、立上つて暫く歩み出すと、又屈んで何かしている、変な事をするものだと思ひながら近寄つて見ると、それは道傍の石や樹木に矢印の道しるべを書いているのである。そのために首に紐にて竹筒を下げ、その中に墨汁を入れておくのであつた。青年達が道しるべを書くものと考へたが、乞食が書いて歩くのを見て感心した。

生活困窮者と見られる遍路が道傍の石や樹木に矢印の道しるべを書いていることが紹介されている。四国遍路の道標の整備はこうした名もなき人々による善行によつて支えられていることがわかる。前述した多数度巡拝の遍路の存在も、何度も遍路道をまわることは、遍路道や道標石の保存修復のパトロール活動的な役割を果たすことにもつながる。

#### おわりに

以上、本稿の考察により得られた知見を総括し、併せて今後の研究課題と展望を付言して、本稿の結びとする。

四国遍路を体験した昭和初期の案内記類の作者が異口同音に感じたことは、四国遍路の道標石の圧倒的な数の多さ、充実ぶり、道に迷わない安心感である。とりわけ手印や指印によつて進行方向を指し示す意匠は、視認性を高めるための独創的な工夫であり、四国遍路の道標石における顕著な特色といえる。また、弘法大師像という尊像と案内機能が融合した「弘法大師の道標石」としての独自の性格を如実に示している。

さらに、道標石の設置・保全活動は巡礼者の遍路や篤志家、地域住民等によつて今日まで受け継がれている。現在の遍路道には江戸時代から今日に至るまで連続と受け継がれてきた各時代の道標石が圧倒的な多さをもつて現存しているのは日本の他の巡礼には見られない特色といえる。

筆者はこのような特色を備える四国遍路の道標石の存在こそが、四国遍路と

いう巡礼が他に類を見ない巡礼であると考えている。こうした点について、今後は、西国三十三所巡礼をはじめとする国内の諸霊場における道標石との比較検証を通じ、四国遍路の独自性をより実証的に明らかにしていきたい。

最後に、四国遍路の道標石の保全環境について述べておきたい。

野外にある遍路道標石は道路拡張、家屋の解体・新築、都市開発、環境汚染、交通事故・盗難等による滅失など、道標石を取り巻く環境は年々厳しさを増している（写真⑳）。そのような状況下で幸運にも今日残されている道標石は各時代の地域の四国遍路の実態を反映した貴重な歴史資料であり、四国遍路という重層的な文化構造を象徴する重要な文化的景観の構成資産として位置づけられる。これらの歴史的遺産を次世代へ確実に継承していくためには、個々の道標石に対する学術的な再評価を行うとともに、地域社会と連携した保存・管理体制の構築について喫緊に取り組む必要がある<sup>(17)</sup>。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、喜代吉榮徳氏、小松勝記氏にご協力やご助言をいただきました。この場をお借りして深謝申し上げます。

## 註

(1) 今日、四国遍路の道標は様々な材質や方法によって作られているが、本稿では古くから数多く設置され、残存性の高い石造による道標を対象とする。石造の道標は四国遍路の案内記類に「標石」「立石」「道しるべ石」「道路標」などと表記されているが、本稿では「道標石」「遍路道標石」と記載した。また、道標石や案内記類に「順拝」「巡拝」の表記が混在している。史料からの直接引用以外は「巡拝」と記載した。

(2) 今村賢司「道標石から見た四国遍路」（愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路の世界』筑摩書房、二〇二〇年、八六頁）。今村賢司「愛媛の道

標石から見た四国遍路」『四国遍路と世界の巡礼』第三号、愛媛大学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター、二〇一八年。

(3) 荒井とみ三『遍路図会』新正堂、一九四二年。荒井とみ三（一九〇二～一九七一）は本名荒井富三郎、香川県高松市出身。漫画家の宮尾しげをに師事し、絵と文で郷里の高松の史跡・伝説などを地方新聞に数多く発表した。本書の（28）村の悪童たちの接待の場面の挿絵に「（指印）へんろ道」の道標石が描かれている（五七頁）。宮尾しげを『画と文 四国遍路』鶴書房、一九四三年。本書の五、八一、九四、一〇一、一三〇、一三六、一五三、一九七頁などに道標石が挿絵中に描かれている。永井刀専は愛媛県松山市大街道二丁目で刀専印章店を営む。

(4) 島浪男「札所と名所 四国遍路」宝文館、昭和五年（一九三〇）、四三〇～四三三頁。島浪男はペンネーム。本名は飯島實。島は「私の四国霊場順拝の旅の第一目的は、今まで一部の信仰本位の旅行者だけにしか為されてゐなかつたこの旅行課目を一般の遊覧本位、観光本位の旅行者のために開拓しやうと言ふのにある。それがためには、先づ第一にこの旅行に要する日数をもう少し切り詰めなければならない。普通この旅行に要する四十日乃至六十日と言ふ長い日数は忙しい現代人のためにはあまりに超時代的な註文だ。宿も食膳に相當のカロリーがとれて、寝具にもともかく其の日其の日の疲労が恢復される様な宿を求めなければならない。」と述べ、四国遍路を観光化するためには、日数の短縮、食事や寝具が満足できる良質の宿が必要であると説く。

(5) 大正時代（一九二四年）に日本旅行文化協会（後の日本交通公社、現JTBの前身）が創刊した歴史ある旅行雑誌『旅』を指し、日本の旅行情報誌のバイオニアとして、作家の紀行文や観光地の案内などを掲載し、昭和期まで発行された。

(6) 註（4）前掲書。

(7) 安田寛明（安田寛太郎）『四国遍路のすすめ』復刻版、安田一雄発行、二〇〇〇年。安田寛明（僧籍名）は本名安田寛太郎、東京中野町（現中野区）東京総本山宝仙寺住職の賛意を得て、一八歳にして四国遍路に立出。七度の参拝を行う。宝仙寺大師堂住職。昭和五年の六六歳時に四国霊場第五十番繁多寺において参拝者一万人接待を成就する。昭和一五年没、享年七六才。

(8) 遍路同行会『遍路 復刻版』不二出版、第一巻第十号、昭和六年、八〇頁。

(9) 註（7）前掲書、一六頁。

(10) 註（7）前掲書、五七頁。

- (11) 註(10)に同じ。
- (12) 註(10)に同じ。
- (13) 鶴村松一『中務茂兵衛著 四国霊場略縁起道中記大成』松山郷土史文学研究会、昭和五四年、四頁。
- (14) ドイツ東洋文化研究協会(OAG)の会報の増刊号として刊行。収録する写真図版には、当時の札所の景観のみならず、自然景観、路上の風景、遍路道標石、遍路の装束、石手寺を詣でたハンセン病患者、子どもが書いた龍光寺の納経帳、著者の納札(願主有富礼道坊寝児)などが収録されている。本書の日本語訳本(佐藤久光・米田俊秀訳『同行二人の遍路―四国八十八ヶ所霊場』大法輪閣、平成二四年)が行われている。
- (15) 註(14)前掲書、四九―五〇頁。
- (16) 註(14)前掲書、一九六頁。『伊予の遍路道』愛媛県生涯学習センター、平成一四年、一八七頁。
- (17) 安達忠一『同行二人 四国遍路たより』のはしがきによると、「私は亡父の冥福を祈り併せて自他の厄難を免る為四国を遍路して、斯した意味の正確な道中案内の乏しいのを知り、且は多くの人々の同様の欲求のあつた事を思い、此念願を果し度、爾来一年間此事のみに心願して数度の調査を重ね、禿筆を走せ漸く此書を物することになりました。」とある。屏風浦海岸寺内の四国遍路旧蹟顕彰会の高橋厚温による覆刻版の添え書きには、「とにかく、名文です。短い文章で、要点をもらさず、やさしい語りかけ―ここ、十数ほど随分、案内書も出されましたが、この本ほど、偏見なく、独断なく、要領よくすなおに書かれているものはない。昭和九年と申しますと、まだ、昔のままの道にほとんど近いようです。従ってこの本は、へんろ道の考証として、何よりのよるべとなりましょう。歴史の道の一つの証拠だとも思うのです。」と本書を推奨している。
- (18) 安達忠一『四国雑話』(第四卷第九号)昭和九年(細田哲史発行『復刻版 遍路』第一巻、不二出版、三五〇頁)。
- (19) 貞享四年の真念『四国邊路道指南』には「四箇国総八十八箇／内二十三箇所 阿州 道法五十七里半三町 四十八町一里／同一十六箇所 土州 道法九十一里半五十町一里／同一十六箇所 予州 道法百十九里半 三十六町一里／同一二十三箇所 讃岐 道法三十六町一里」とある(『四国遍路記集』伊予史談会、昭和五六年)。
- (20) 高群逸枝著・堀場清子校注『娘巡礼記』岩波書店、二〇〇四年。『お遍路』厚生閣、昭和二三年。四国霊場大観刊行会編纂『四国霊場大観』弘法教会本部発行、昭和一年。
- (21) 註(20)前掲書『お遍路』二二七―二三八頁。
- (22) 門田恭一郎翻刻「愛媛県立図書館蔵本 四国徧禮道指南増補大成」明和四丁亥正月再板版。『お遍路』掲載の引用文と異なる箇所があり、比較参照の為、門田氏に該当箇所の翻刻文を記載する(／は原文の改行)。「此道しるべなれる事ハ真念法師五相／三密の繩牒を出て南海千里の金場を／踏れしに多岐羊腸行脚のきもを／けし香に人家なくして岩もる、水／に枕をかたむけ遠く客舎を絶てハ山を／帯雲をしとねとせらしま、に迷方／をあはれむこ、ろせちにしてふた、ひ／ミたび烏藤をめぐらし谷ふかく又濱を／つくし聞て書見てしるされ九々にあまる／寺号村つゞき道の遠近いちしるしく／一巻の珠となりぬこれを梓にことぶき／してあまねく扶桑にほどこさんと／せられし衣鉢の外に餘長なくむれ／しくやミなんことをかなしまれけるに／大坂野口氏宝財を／大師の恩海になけれしかバ終に求／願ことたりぬ」
- 「一、順礼の道すぢに迷途おほきゆへに十方／乃喜捨をばげまし標石を立おくなり／東西左右のしるべ并施主の名字彫刻／入墨せり年月をへて文字おちなバ／邊路の大徳并其わたりの村翁再治／所奉仰なり」。
- (23) 真念・稲田道彦『四国徧禮道指南 全訳注(講談社学術文庫2316)』講談社、二〇一五年、一二八―一二九頁。稲田道彦著・香川大学瀬戸内圏研究センター編集『四国徧禮道指南―読み下し文と解説』美巧社、二〇一三年、八頁。
- (24) 註(3)宮尾前掲書。道標石の向きの悪戯が記載されている。「遍路案内の路標にあいまいながある。持参の参謀本部の地図を見ると、確実に反対を指していたので、他の遍路達に、それを見せ、その地図通りの道を行くと(中略)この村をぐる／廻りして、道が判らず困つていのです(中略)村の路標案内が右を左と反対の悪戯がしてあるのである」(五五頁)。
- (25) 現存せず。永井刀専が描いた道標石(写真①)と同じものと推察される。現在立てられているのは昭和四八年の再建によるもの(『松山の道しるべ』松山市教育委員会、平成一一年、四〇頁)。
- (26) 註(3)宮尾前掲書、四―五頁。道標石が挿絵として描かれているのは、阿波の極楽寺道の手印入りの道標石(五頁)、土佐の金剛福寺道の宝暦年間の地藏型道標石(八一頁)、龍光寺道の鳥居前の道標石(一〇二頁)、繁多寺道の道標石(一一三〇頁)、榮福寺道の総社川近くの道標石(一二六頁)、三角寺奥院道の道標石(一五三

- 頁)、讃岐国分寺道の遍路道標石(一九七頁)など。
- (27) 橋本徹馬『四国遍路記』紫雲荘出版部、昭和二五年、一―二頁。
- (28) 愛媛県歴史文化博物館学芸員ブログ「昭和時代の四国遍路道中図から見た遍路事情」の「91 御詠歌から軍歌へ」「93 戦争がもたらす悲劇」(筆者執筆)。
- (29) 註(26) 前掲書、七九―八〇頁。
- (30) 註(26) 前掲書、二〇四―二〇五頁。
- (31) 註(26) 前掲書、二〇五頁。
- (32) 愛媛県久万高原町菅生の大宝寺に向かう左カーブの車参道と峠御堂に向かう遍路道とが交差する所に位置する(写真③の左側)。刻字は「(手印) (手印) 昭和五年六月 四国順拝八十八度目為供養 栗田修三密巖」とある(『伊予の遍路道』愛媛県生涯学習センター、平成一四年、一九一頁)。
- (33) 喜代吉榮徳『四国遍路 道しるべ』付・茂兵衛日記』海王舎、昭和五九年。喜代吉榮徳『中務茂兵衛と真念法師のへんろ標石並びに金倉寺仲司文書』海王舎、昭和六〇年。喜代吉榮徳『四国の辺路石と道守り』海王舎、平成三年。今村賢司「愛媛の遍路道標考」『四国へんろの旅 絵図・案内記と道標』愛媛県歴史文化博物館、平成二四年。
- (34) 喜代吉榮徳「武田徳右衛門丁石の研究」『善通寺教学振興会紀要』第一五号、二〇一〇年。小松勝記『遍路標石 徳右衛門標石特集』安楽寺、平成二七年。註
- (31) 今村前掲書。
- (35) 註(33) 喜代吉前掲書、一八―一九頁。「(前略) 参詣の人々日々月々にい屋満し信心の輩そのかざるを志らずこのゆへに所々道志る遍ありといへども只恨ハ道の里数の委しからざることをうれふる人多し是によつて高祖の尊像を上すへ長ケ五尺の町石を造立し霊場に立置んことを希といへども力ともし介れハ只願ハ十方有信の御方一紙半銭にかぎらず浄財を我願海になげうつて早く此願を成就せハ禍を千里の外にはらひ福ハ潮のみちくるごとくならんと志可いふ」とある。
- (36) 註(33) に同じ。
- (37) 喜代吉榮徳「刻手行者、川の屋政吉」『四国辺路研究』第七号、一九九五年。
- (38) 刻字は「(手印) へんろ ひぜん五島吹吉」とある(『伊予の遍路道』愛媛県生涯学習センター、平成一四年、一八五頁)。
- (39) 註(33) 今村前掲書、五四頁。
- (40) 今村賢司「近世前期における伊予国松山地方の四国へんろの様相―真念『四國邊路道指南』以前の遍路道標と札挟みを素材として―」『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』第二〇号 平成二七年。愛媛県教育委員会『四国八十八箇所霊場詳細調査報告書 第四十七番札所八坂寺』令和五年。
- (41) 註(2) 今村前掲書、八五―八六頁。
- (42) 四国霊場の札所寺院に奉納された絵馬には本尊や弘法大師によつて病気が治癒した霊験記、足の不自由な遍路が奉納した箱車などが残されている。今村賢司「阿波国分寺『靈験譚奉納額』にみる明治後期の四国遍路」『弘法大師空海展』愛媛県歴史文化博物館、平成二六年。
- (43) 貞享四年の真念『四国邊路道指南』に「此所に道休禪師がはか有。此禪門ながく大師に帰命し奉り、はき物せずしてじゅんれいする事十二度、すべて二十七度の遍路功なりて、つゝに身まかるとて(後略)」、元禄三年の『四国徧礼功德記』に与州越智郡今治余村の治右衛門、与州宇和郡野井村のたなべ伊左衛門らは「遍礼数度せし」とあり、多数度順拝者が紹介されている(『四国遍路記集』伊予史談会、昭和五六年)。また、第五十四番延命寺の境内には、四国霊場を二十一度順拝した宝暦二年(一七五二)の頓圓自覚法師碑がある。
- (44) 頼富本宏『四国遍路とはなにか』角川学芸出版、平成二二年、一七〇―一七三頁。
- (45) 喜代吉榮徳「コレマデノ我が道遙、御手判道中」『駄家通信』第五号、海王舎、令和七年。
- (46) 昭和一三年(一九三八)の「遍路日誌」(第八卷第六号)復刊版 遍路2―2―36 276頁。
- (47) 今村賢司・亀井英希「調査報告 松山地方の遍路道標石の現状と保存について」『研究紀要』第二六号、愛媛県歴史文化博物館、令和三年。今村賢司・亀井英希「調査報告 新出資料 松山市道後湯之町の遍路道標石」『研究紀要』第二九号、愛媛県歴史文化博物館、令和六年。



写真② アルフレート・ボナーが捉えた道標石（『同行二人の遍』収録、当館蔵）とその現況（明治11年建立、宇和島市三間町）



写真① 永井刀專作「木版彩色絵葉書」  
「伊豫の春」昭和8年頃、当館蔵



写真④ 橋本徹馬『四国遍路記』で  
紹介する「妙な立石」(左)



写真③ 宮尾しげを『画と文 四国遍路』  
の挿絵に描かれた蒼社川の土手の道標石  
(嘉永3年、今治市小泉)



3



2



1

写真⑤ 真念の道標石

⑤-1 延命寺境内  
(今治市阿方)

⑤-2 国分寺附近  
(今治市国分)

⑤-3 宝寿寺境内  
(西条市小松町。宝  
寿寺蔵、当館保管)



3



2



1

写真⑥ 武田徳右衛門の道標石 (徳右衛門丁石)

⑥-1 小山番所附近  
(愛南町一本松町)

⑥-2 鵜田峠頂上  
(寛政9年、久万高原  
町二名)

⑥-3 西林寺前  
(松山市南高井町)



3



2



1

⑦-1 松山市道後上市橋のたもと(明治21年、四国巡拝100度目。当館蔵)

⑦-2 柏橋のたもと(明治34年、四国巡拝184度目、愛南町柏)

⑦-3 前神寺東参道(明治37年、四国巡拝202度目、西条市洲之内)

写真⑦ 中務茂兵衛の道標石



写真⑨ 手形石 (今治市内)



写真⑧ 政吉の道標石 (高知県安芸郡田野町、小松勝記氏写真提供)



写真⑪ 蒼社川の土手に建てられた道標石  
(大正11年、今治市中寺)



写真⑩ 安芸の宮島を案内する道標石  
(明治19年、松山市堀江町)



写真⑬ 近道を案内する道標石  
(明治19年、徳島県阿南市)



写真⑫ 新道開通の道標石  
(明治40年、西予市宇和町)



3



2



1



6



5



4



8



7

- ⑭-1 年不明、久万高原町菅生槻之沢
- ⑭-2 明治23年、久万高原町明神三坂
- ⑭-3 貞享2年、松山市恵原町
- ⑭-4 年不明、松山市畑寺
- ⑭-5 文政9年、松山市桑原
- ⑭-6 年不明、西条市丹原町
- ⑭-7 年不明、西条市小松町
- ⑭-8 天明8年、四国中央市中曾根町

写真⑭ 手印を付けた四国遍路の道標石



3



2



1



6



5



4



8



7

- ⑮-1 慶応元年、宇和島市津島町
- ⑮-2 天保2年、松山市窪野町
- ⑮-3 文政4年、松山市浄瑠璃町
- ⑮-4 明治40年、松山市浄瑠璃町
- ⑮-5 嘉永5年、松山市太山寺町
- ⑮-6 嘉永4年、今治市新谷
- ⑮-7 安政5年、西条市水見
- ⑮-8 弘化3年、四国中央市金田町

写真⑮ 指印を付けた四国遍路の道標石



3 文久3年、松山市馬木町



2 嘉永7年 松山市鷹子町



1 昭和5年、宇和島市津島町

写真⑯ 順打ち・逆打ち対応の道標石



3 年不明、四国中央市川滝町



2 明治33年、松山市北条



1 嘉永4年、久万高原町二名

写真⑰ 順拜度数を記した道標石



2



1



4



3

- ⑱-1 寛政7年、久万高原町菅生
- ⑱-2 寛政7年、西予市宇和町
- ⑱-3 年不明、今治市新谷
- ⑱-4 明治40年、大洲市

写真⑱ 弘法大師の道標石



2 年不明、松山市鷹子町



1 年不明、宇和島市津島町

写真⑨ 弘法大師の石仏として祀られている道標石

### 遍路道標石の受難 自然的要因、人的要因など

- ・風化、剥離
- ・酸性雨
- ・苔、地衣類
- ・自然災害  
(土砂・水害・地震等)
- ・移動、移設
- ・欠損、折損、埋没
- ・放置、廃棄
- ・汚れ (ペンキ等)
- ・交通事故 (消滅)
- ・行方不明  
(道路、住宅開発等)
- ・盗難、転売
- ・忘却、無関心

A grid of 10 small images showing various states of stone markers: broken, covered in moss, buried, or missing.

写真⑩ 四国遍路の道標石をとりまく環境